

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

現代日本語のヴォイスに関する研究—中国語との対照を交えて—

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-09-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2290

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



論文内容の要旨

学位申請者氏名 李^{Li} 藝^{Yi}

本研究は現代日本語のヴォイスについて、非情物主格受動文を中心に、中国語との対照も視野に入れつつ論じたものである。まずヴォイスとは何かという問いから入り、ヴォイスの形式を厳密に規定したうえで、現代日本語の受動態を対象として、行為者標示の方法を手掛かりに考察した。更に、中国語との対照に移って、中国語受動文の分類を明確にし、特徴的な構造を分析するなかで、各々の問題点を検討した。

本研究の序章に続く第二章から第七章においては、以下の観点から考察した。

第二章「ヴォイスの定義と形式」では、先行研究を踏まえて、本研究で用いるヴォイスの定義を厳密に規定し、さらに日本語と中国語のヴォイス形式について概観した。ヴォイスとは何かという問いに対して、通言語的には、事態の成立に関わる人や物を表す名詞の格標示が、何らかの形態的・統語的变化に伴って体系的に変更されるとき、形態的・統語的变化に認められる文法カテゴリをヴォイスと考える。具体的に見ると、日本語では、元の動詞のガ格を規則的にほかの格に置き換える述語の形式が有標のヴォイス形式であり、受動態、使役態、可能態、自発態がそれに該当する。中国語では、動作主体と対象の位置関係を体系的に変更する形式が有標のヴォイス形式と捉えられ、該当する形式は受動構文である。中国語の使役構文や“把”構文は“被”構文に類似した特徴があるため、一つのカテゴリにまとめて議論されることはしばしばあるが、ヴォイスというカテゴリには収まらない。

第三章「現代日本語の行為者ニ標示受動文」では、先行研究の枠組みを承けつつ、行為者ニ標示受動文の分類を再提案し、各々の特徴を記述した。具体的には、受影受動文において視点が主格項に置かれる要因を受影性としたうえで、潜在受影者の概念を再検討した。広義の所有者が潜在受影者となりうるほか、話者自身が当該事態から何らかの心理的影響を受ける場合、話者自身も潜在受影者となるということを指摘した。また、属性叙述受動文の本質を事態の観察可能時が特定でない点にあると見て、属性叙述受動文の行為者が概ね非特定の人であるために、特定指示である主格項の方に特に視点が寄せられやすいことを示した。他方、狭義再帰的な受動文において行為者ニ標示が許容されるのは、到着点の二格によって行為者標示が代行されていることによる。このタイプでは、能動文から受動文への変換は「X ガ Y (モノ) ヲ (Z (≒X 自身) ニ) V スル→Y ガ X (=Z) ニ V サレル」となることが多い。前述した純粋な行為者ニ標示の場合、ニ標示が成立するのは特に主格項寄りの視点による。再帰的な動詞の受動文における二格行為者は、受動文の主格項への共感性が特に高い場合の行為者とは異なる理由で二格をとっていることになる。

第四章「現代日本語の行為者ニヨッテ標示受動文」では、一人称行為者のニヨッテ受動文の存在から、行為者ニヨッテ標示受動文が視点表現でないことを論じた。この種の受動文は、話者が事態の中に身を置きながら、傍観者の目に事態がどのように映っているかを述べようとする場合に用いられる。視点表現ではないため、発話行為の視点階層や有生性の視点階層が適用されない。ニヨッテは能動文にも受動文にも使用可能であり、諸用法のうち原因を表す用法が行為者を表す用法に最も接近している。書き言葉において排他的な情報の焦点を明示するというのが「ニヨッテ」の主な使用動機であり、受動文は二次的に生じたものである。典型的な行為者ニヨッテ標示の受動文は、

行為者が主格項に物理的な力を加えて、主格項に状態変化を引き起こすことを含意する。この意味特徴から、行為者ニヨッテ標示は動詞の類型と関連性を持つ。

第五章「非情物主格・行為者ニ標示受動文」では、現代日本語の非情物主格・行為者ニ標示の受動文を対象に、主節における場合と従属節における場合に分けて、動詞の種類との関係も考慮しつつ考察した。主節における非情物主格・行為者ニ標示受動文は、本質的に視点の表現である。「モノ／コトがヒトに…レル・ラレル」という構造を成す受動文において、述語動詞がⅠ類動詞（動作の対象に状態変化を必ず引き起こす）である場合は、受影者の潜在が、主格項に特に視点が寄せられる理由となっている。「モノ／コトがモノ／コトに…レル・ラレル」という構造を成す非情物主格・非情行為者の受動文においては、主格項も行為者もモノやコトであり、話者が特に主格項寄りの視点をとる理由は有情行為者の場合より広い。従属節について見ると、日本語は主節の主格と従属節の主格を揃えようとする傾向があり、従属節で受動態が頻繁に使われる。構文上の要請から現れる受動態には受影性が含意されないが、主節の主格に揃えることでやはり従属節の主格項に視点が特に寄せられ、行為者ニ標示が用いられることになっている。この場合、行為者ニヨッテ標示は、変化の原因としての行為者に焦点が置かれなかり不自然である。従属度の最も高い「A類」の従属節において、非情物主格受動文の行為者ニ標示は、統語的に決まっている現象ではあるが、本質的には視点の表現といえる。

第六章「行為者の現れない受動文―「ラレテイル」の文を中心に―」では、「ラレテイル」の形をとっている日本語の直接受動文において行為者が標示されない場合の要因を考察対象とし、①「ラレテイル」のアスペクト的意味及び「ラレテイル」の前に来る動詞の意味特徴と、②(想定される)行為者の指示特性という、二つの観点から分析した。

第七章「現代中国語の“被”受動文―日中対照研究からのアプローチ―」では、中国語の有標受動文の分類について考察し、“被”受動文を中心に日本語との相違点と共通点を見た。基本的に、日本語の行為者ニ標示受動文は主格項に叙述の視点を寄せる表現であり、ニヨッテ標示受動文は行為者に情報の焦点を置く表現である。他方、中国語の“被”受動文の成立を左右するのは動作の影響であり、影響を明示することが受動文の目的といえる。この本質的な違いが様々な側面に反映されている。中国語の受動文については、大きく受影性が関与する受影受動文と、受影性が関与しない属性叙述受動文に分けることができる。受影受動文について、日本語と比べて中国語では事態の客観的把握が基本であり、一人称行為者の直接受影受動文が問題なく使える。間接受影受動文について、中国語では自動詞はそれのみで間接受動文を作るのは難しいが、結果補語などの成分を付け加えれば間接受動文の許容度が高くなる。特殊な構文の従属節においては、間接受動文がさらに成り立ちやすくなる。他動詞が間接受動文を成立させるためには、対格項以外の他者への影響を含意していなければならない。その含意がなければ、受影者が被害を受けたと思っても、他動詞による間接受動文は成り立たない。属性叙述受動文は受影性に関係せず、主格項の属性について述べる受動文である。管見の限り、これまでの研究は中国語の属性叙述受動文を単独の一類と見ていないが、受影性がない点はほかのタイプの受動文と大きく異なるので、区別する必要がある。

以上、各章の内容について概観した。本研究では受動態に絞って考察したが、今後の課題として、受動態について未解明な点を研究するほか、使役態についても考察しなければならない。また、日中両言語に見られる受動と使役の接近も重要な言語現象であり、引き続き研究を進めて行かなければならないと考える。

キーワード： 受動態 行為者標示 視点 焦点 他動詞